

第4回 お金と経済

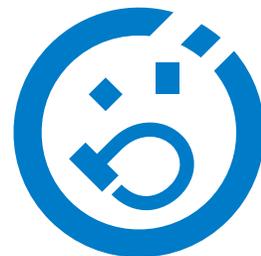
本講義資料は、金融リテラシーに関する講義を行うことを検討している方や実際に講義をされている方などを対象に提供しています。

ご使用にあたっては、下記リンク先の「講義資料の使用に関する留意事項」をご確認ください（クリックすると、J-FLEC HP（金融経済教育推進会議 大学連携講座ページ）に遷移します）。

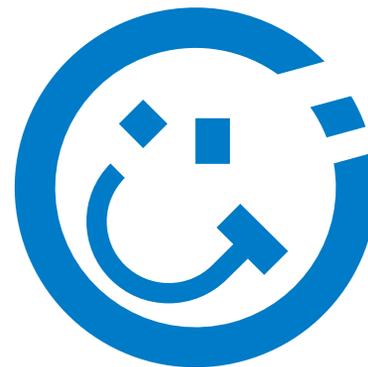
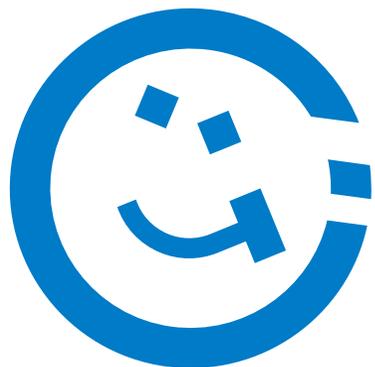
<https://www.j-flec.go.jp/conference/collaborative-courses/#tg3>

J-FLEC

金融経済教育推進機構

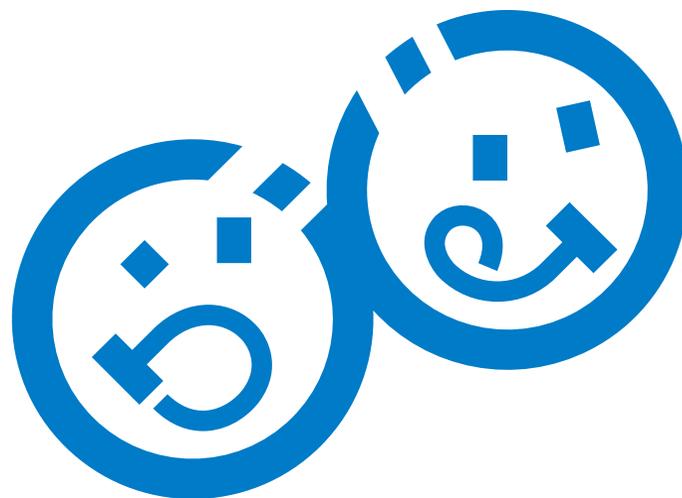


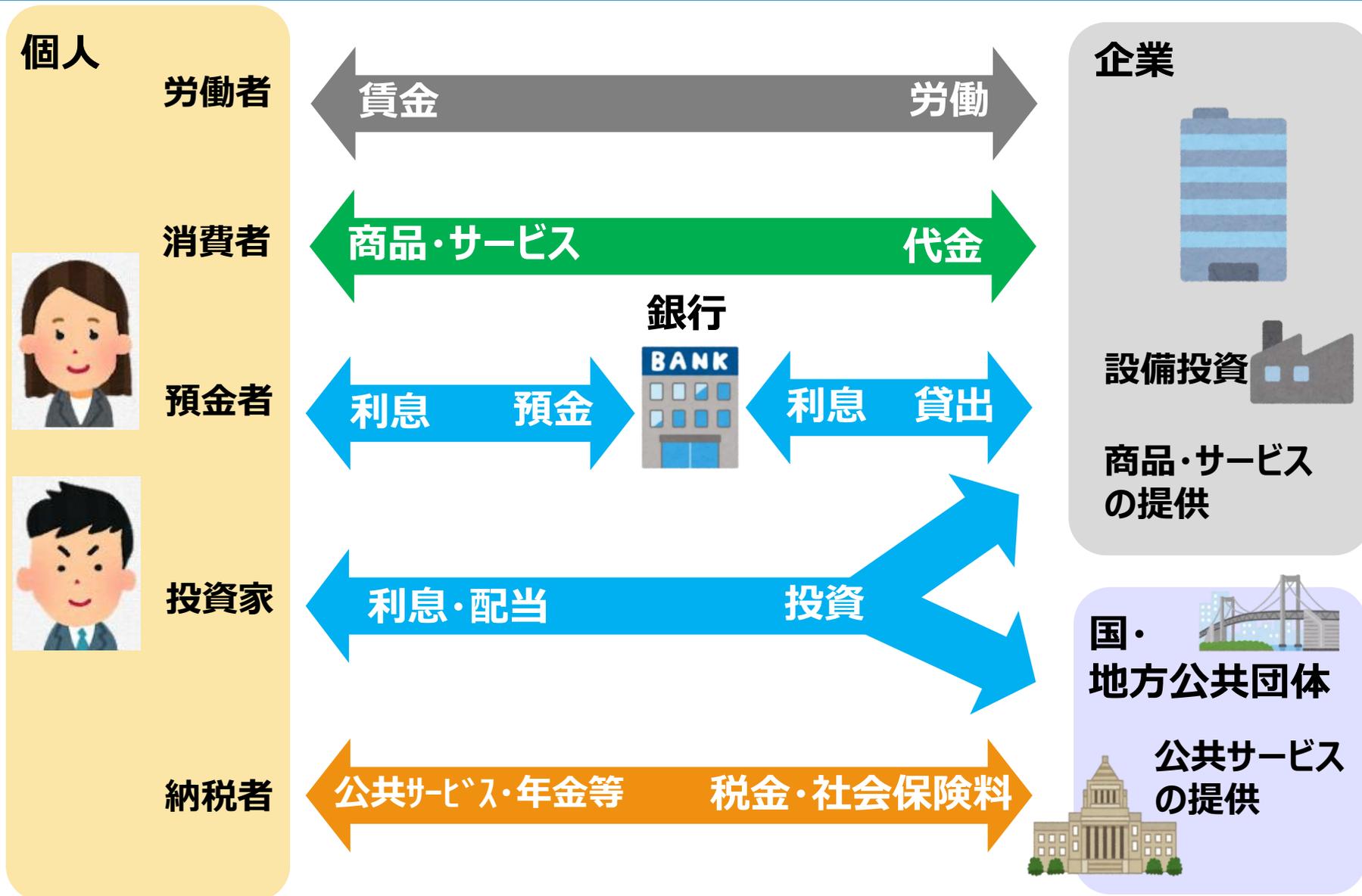
- ① お金と経済
- ② 金利の知識
- ③ リスクとリターン



1

お金と経済





物価

商品やサービスの
値段

商品やサービスを、

- **買いたい人（需要）** と
- **売りたい人（供給）** との
バランスで決まる。

賃金

提供する労働の
値段

労働力を、

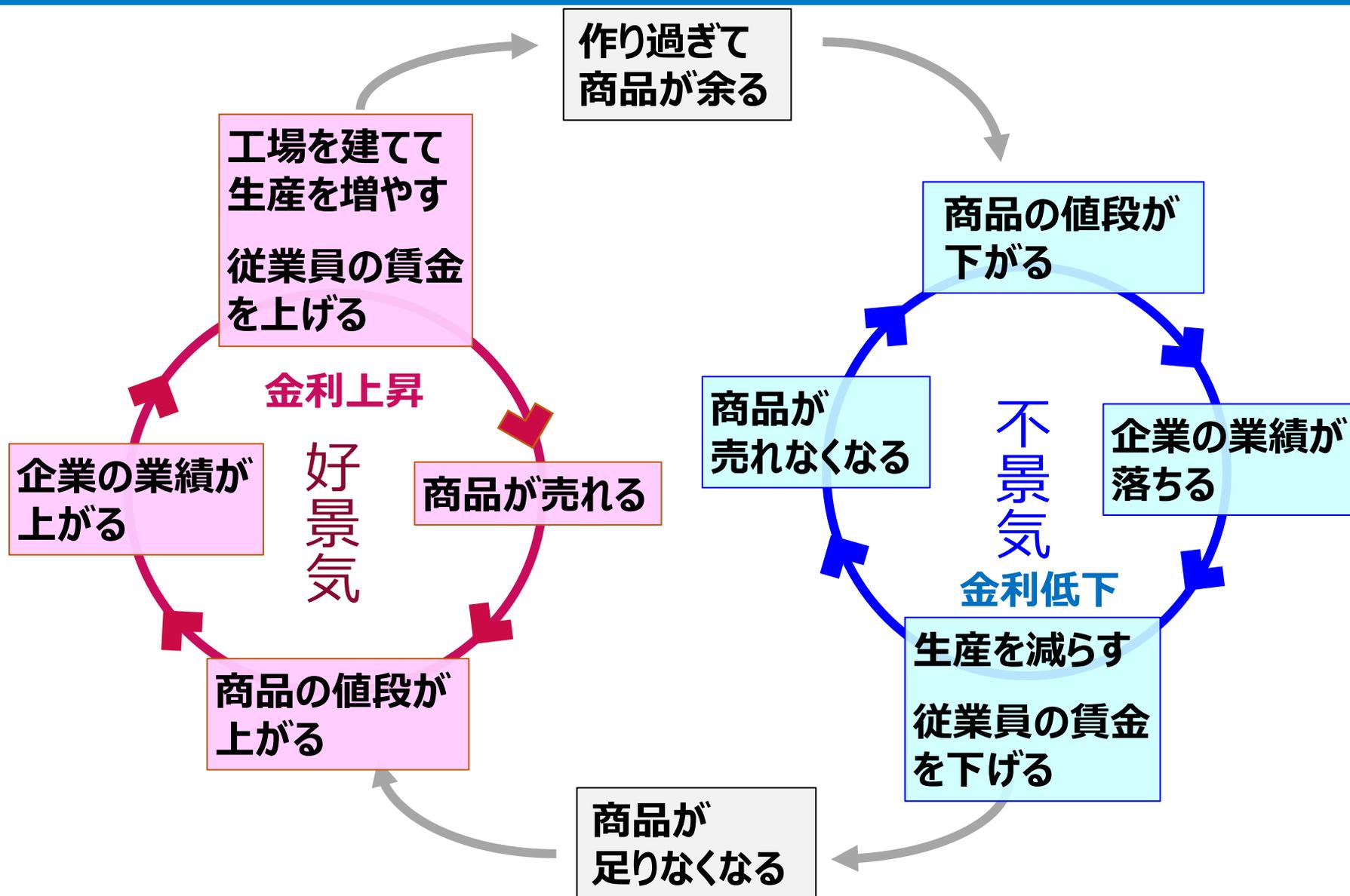
- **雇いたい人（需要）** と
- **提供したい＝働きたい人（供給）** との
バランスで決まる。

金利

貸し借りするお金の
値段（使用料）

お金を、

- **借りたい人（需要）** と
- **貸したい人（供給）** との
バランスで決まる。



- 景気が良いとき（悪いとき）に、賃金、物価、金利はどのように変化すると思いますか？

	景気が良い	景気が悪い
賃金	() 企業収益が 〔 〕から	() 企業収益が 〔 〕から
物価	() 家計の消費が 〔 〕から	() 家計の消費が 〔 〕から
金利	() 銀行などからお金を借りたい 企業が〔 〕から	() 銀行などからお金を借りたい 企業が〔 〕から

- 世界で起きているインフレには以下の態様がある。

	事 象	中央銀行の対応
デMAND・プル型	<ul style="list-style-type: none">● 景気全般が過熱し、物価上昇が加速。● 賃金の上昇を伴うことが多い。	物価上昇を抑制するため、金利を引き上げる
ボトルネック型	<ul style="list-style-type: none">● モノ不足やエネルギー価格上昇によって物価が上昇。● 企業や家計の所得が減少。	景気の悪化を防ぐため、現状維持（金融緩和）

- 景気の変動は、株価や債券価格など、金融商品の価格にも影響を与えます。

	景気が良い	景気が悪い
株価	() 企業の業績が 〔 〕から	() 企業の業績が 〔 〕から
債券価格	() 金利が 〔 〕から ?	() 金利が 〔 〕から ?

世の中の金利
2%



毎年**2円**の利息が貰える

世の中の金利
3%



価格は**下落** (注)



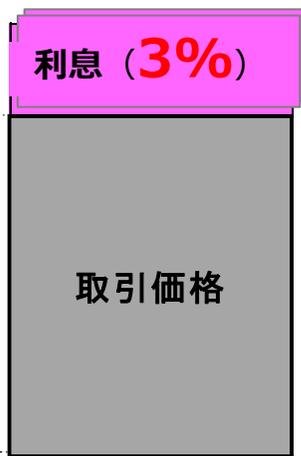
(注) 債券の価格は、この債券の利回り（償還まで持っていた場合に得られる利益の年率）が、ほぼ3%になるまで下落します。

毎年**3円**の利息が貰える

(新しく発行される債券)



=



- 各通貨の**交換比率**を示すもの。日本円の通貨価値は、米ドルと比較して評価するのが一般的。これは、世界貿易における決済通貨としては米ドルが最も多く用いられていることや、日本の貿易相手国の中では米国が中心的な位置を占めているため。
- 一般的に1ドル = ○○円というように、1ドルに交換するにはいくらのお円が必要か、といった尺度で示される。○○の**数字が小さくなるほど（相対的に）円の価値が上昇（＝円高）**。

2011年10月には
75円台を記録

円高

円安

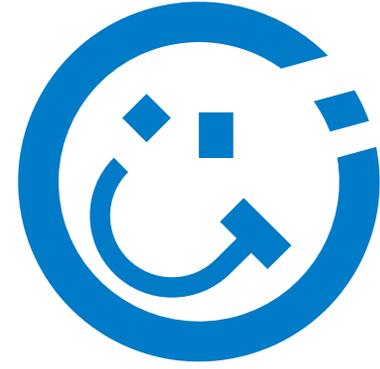
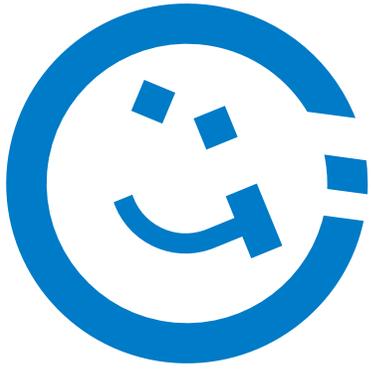
2024年は30数年
ぶりの160円台

- 以下のように様々な変動要因があり、かつその影響は局面によって表れ方が異なる。相場の予測は非常に困難な面がある。

- ✓ **為替に対する需要**
- ✓ **各国の実体経済**
- ✓ **金利動向**
- ✓ **インフレ動向**
- ✓ **地政学リスク（安全志向）**
- ✓ **市場参加者の思惑（投機）**

- 経済主体や事業内容・規模によって大きく変わる。

	円 高	円 安
物 価	<ul style="list-style-type: none"> • 輸入物価は低下。 	<ul style="list-style-type: none"> • 輸入物価は上昇。エネルギー価格も上昇するため、広範な主体に悪影響。
企業活動	<ul style="list-style-type: none"> • 輸出企業や海外で事業展開する企業には収益上マイナス。 • 反面、家計や内需型の中小企業にはプラス。 • かつての円高局面では、製造業の生産拠点が海外へシフトしたことも。 	<ul style="list-style-type: none"> • 輸出企業や海外で事業展開する企業には収益上プラス。 • 反面、家計や内需型の中小企業にはマイナス。
訪日外国人	<ul style="list-style-type: none"> • 減る • 観光産業にはマイナス 	<ul style="list-style-type: none"> • 増える • 観光産業にはプラス

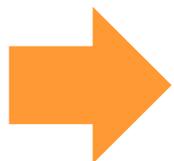


2 金利の知識

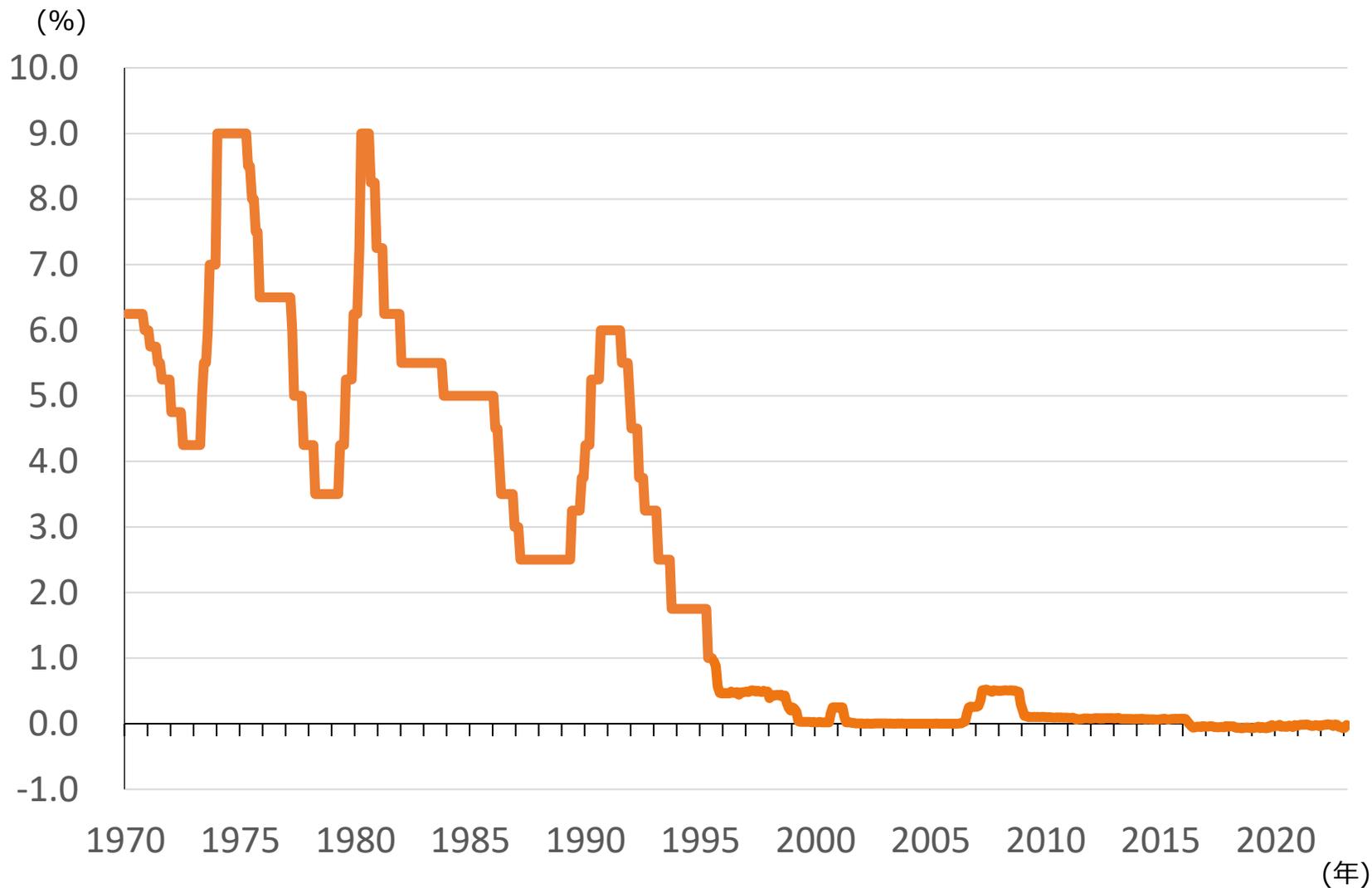


市場金利

金融機関の間で、日々、資金の貸し借りが行われる場は**金融市場**と呼ばれ、資金の需要と供給がバランスする水準に金利が決定される。これを**市場金利**という。



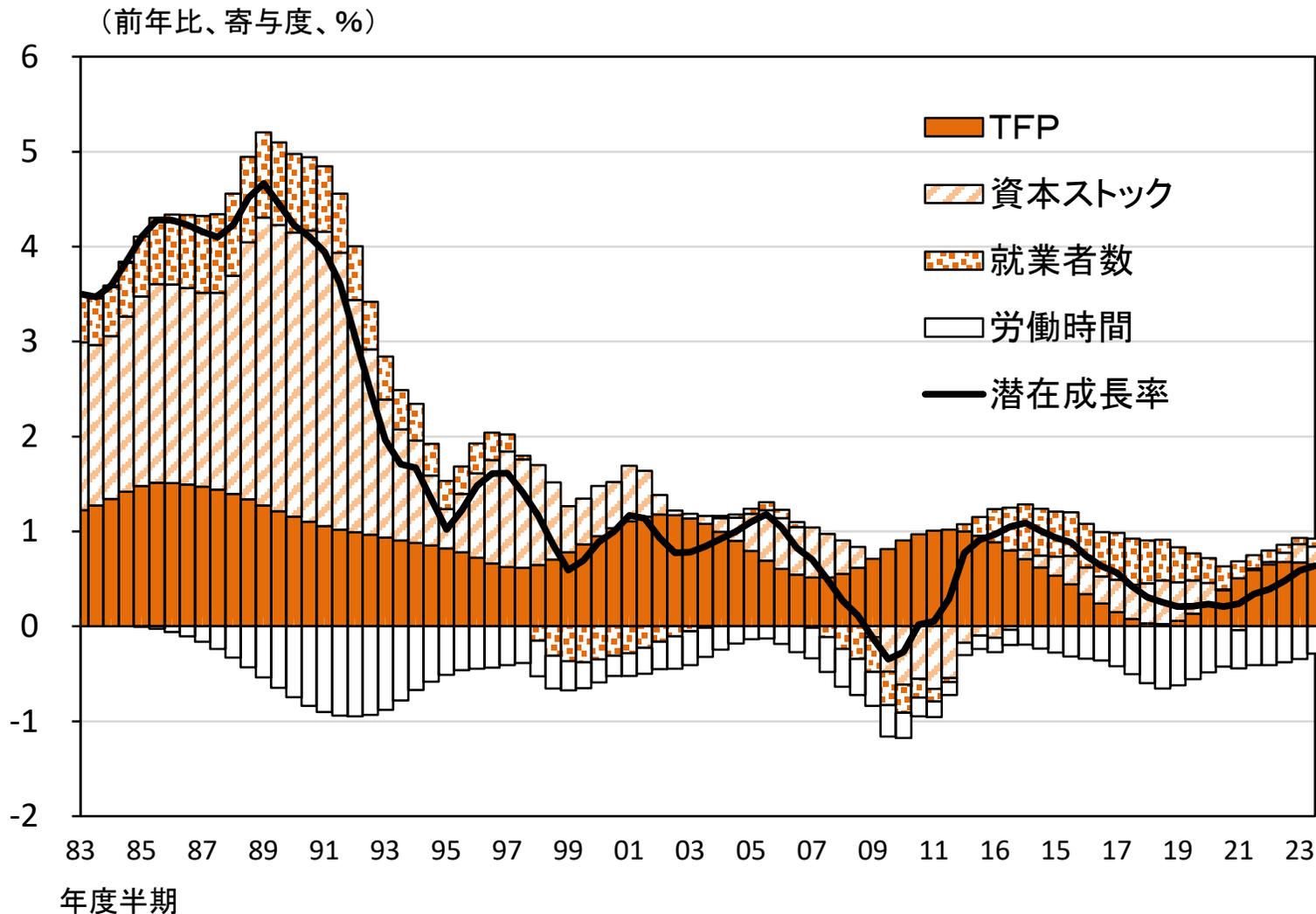
- ✓ 各金融機関は**市場金利**を参考に、**借り手の信用度**などに応じて金利を決める。
- ✓ 金融機関によって金利が異なる場合があるので、比較することが重要。



(出所) 日本銀行

(注) 1995年6月までは公定歩合（基準貸付利率）、1995年7月以降は無担保コールレート・O/Nの月平均金利

潜在成長率の推移



(出所) 日本銀行

(注) 日本銀行調査統計局の試算値。

利子（利息）

借りたり貸したりしたお金に、一定の割合で支払われる対価（金額）

金利（利率）

お金を借りたり貸したりするとき、借り手から貸し手に支払われる利息の、元金に対する割合（%で表示される）

(例) 100万円を年利3%で2年間運用する (税金等は考えない)

<単利>

$$1 \text{ 年目} : 100 \text{ 万円} \times 3\% = 3 \text{ 万円}$$

$$2 \text{ 年目} : 100 \text{ 万円} \times 3\% = 3 \text{ 万円}$$

$$\text{利子 } 6 \text{ 万円} + \text{元本} = 106 \text{ 万円}$$

<複利>

$$1 \text{ 年目} : 100 \text{ 万円} \times 3\% = 3 \text{ 万円}$$

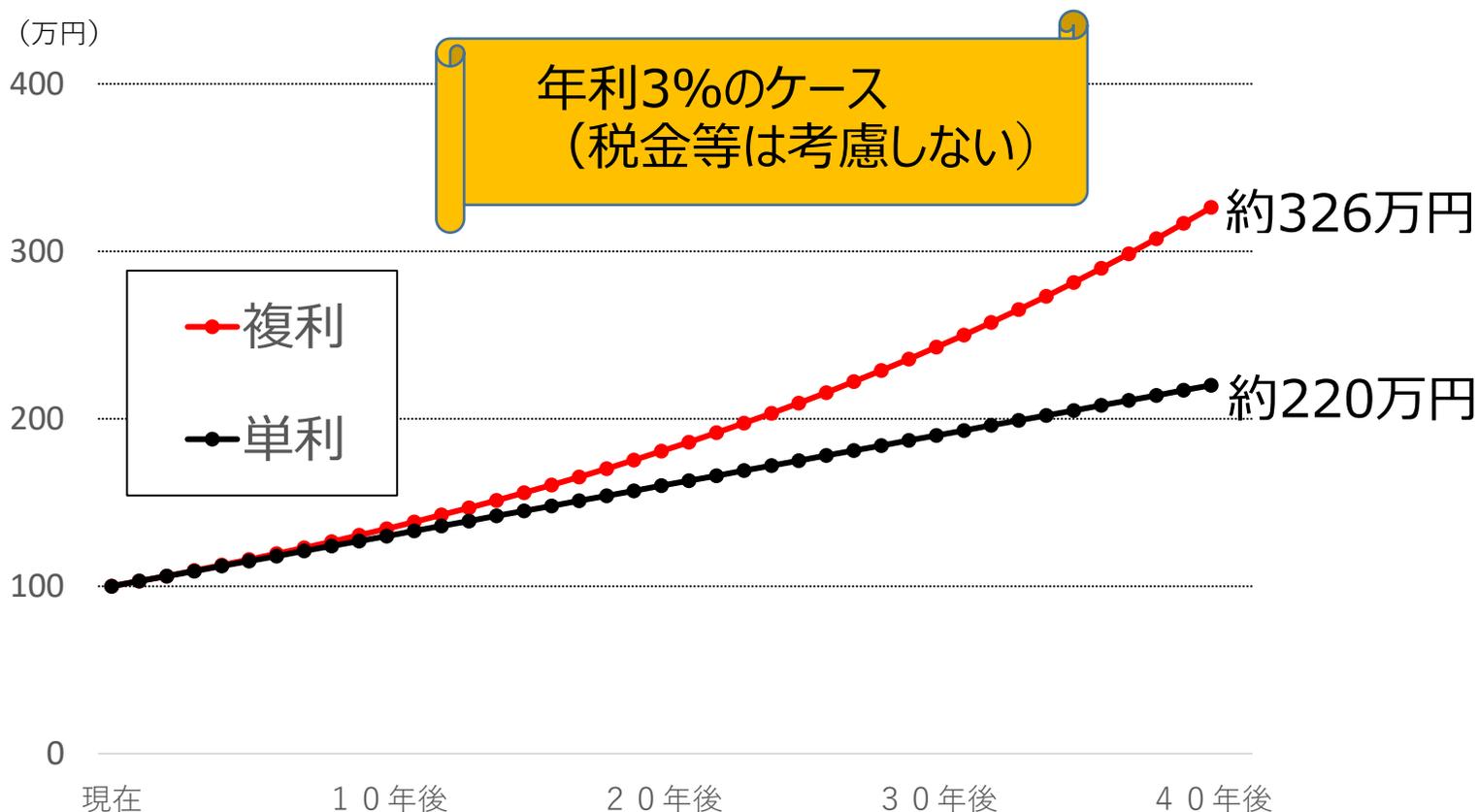
$$2 \text{ 年目} : (100 + 3) \text{ 万円} \times 3\% = 3 \text{ 万}9000 \text{ 円}$$

$$\text{利子 } 6 \text{ 万}9000 \text{ 円}$$

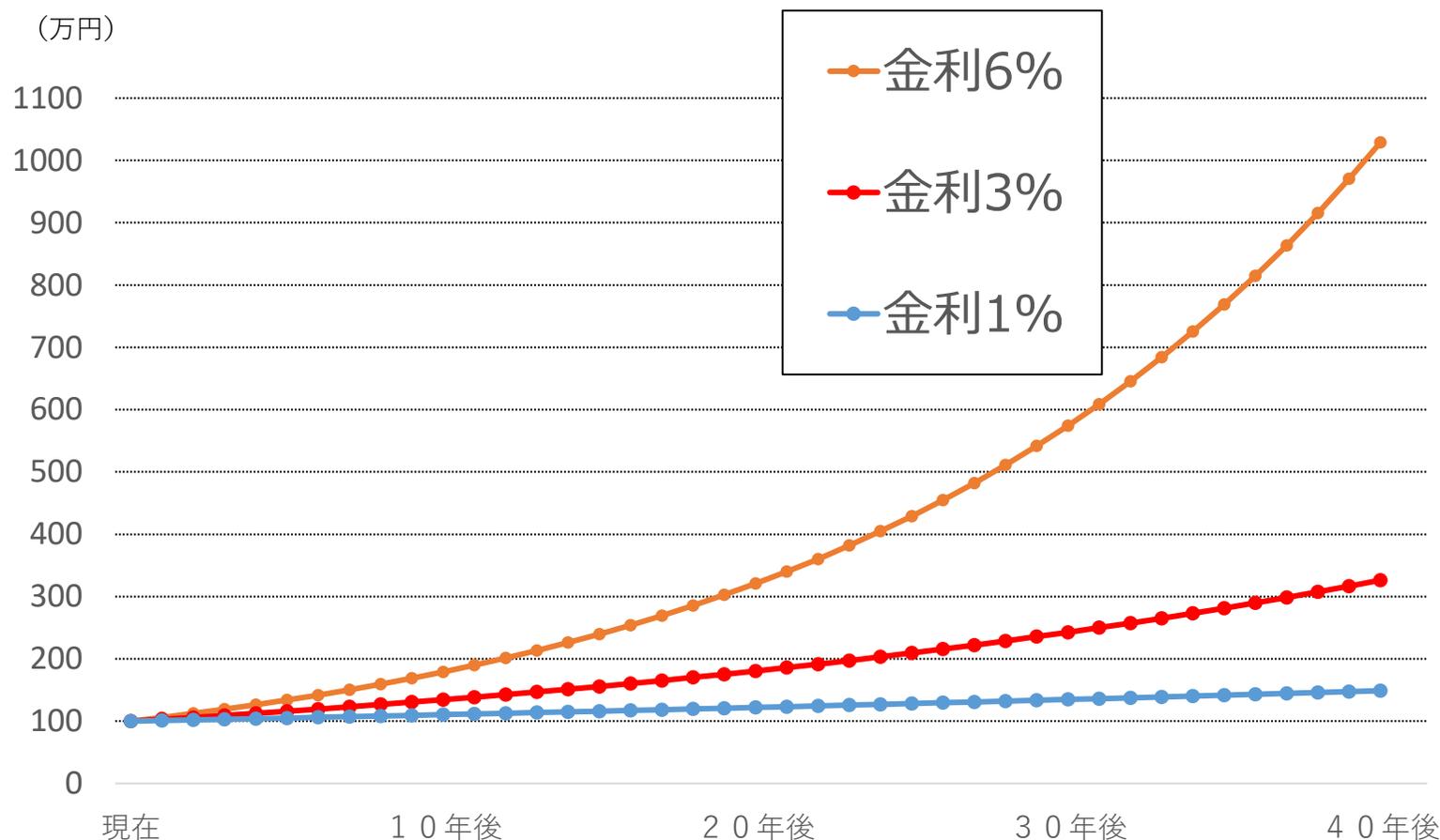
$$+ \text{元本} = 106 \text{ 万}9000 \text{ 円}$$

- 単利の利子は元本に年利を掛けた金額で一定。複利の2年目以降の利子にはそれまでの利子にも利子が付く。

- 単利と複利の運用の差は、期間が長くなるほど大きくなる。



- 複利で利子が増えていく効果は、金利が高いほど大きくなる。



「元本が2倍になる金利と年数の関係」

$$72 \div \text{金利} \div \text{お金が2倍になる期間 (年)}$$

(%)

72の法則の具体例（お金を運用する場合でも、お金を借りる場合でも、使えます）

金利12% : $72 \div 12 = 6$ 約6年

金利 8% : $72 \div 8 = 9$ 約9年

金利 6% : $72 \div 6 = 12$ 約12年

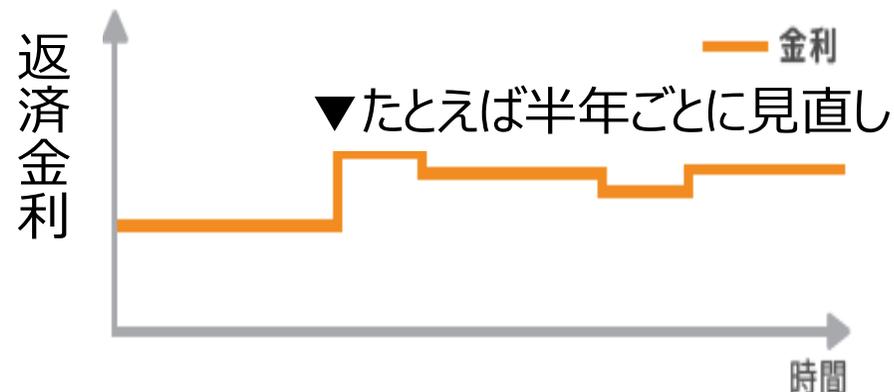
多くの金融取引では、当事者間で、固定金利か変動金利を選択。

- 固定金利： 契約期間中、市場金利の動きと関係なく同一の金利を適用するもの。
- 変動金利： 契約期間中、市場金利の動きを参考に、予め定めたルールで適用する金利を変更するもの。

固定金利型



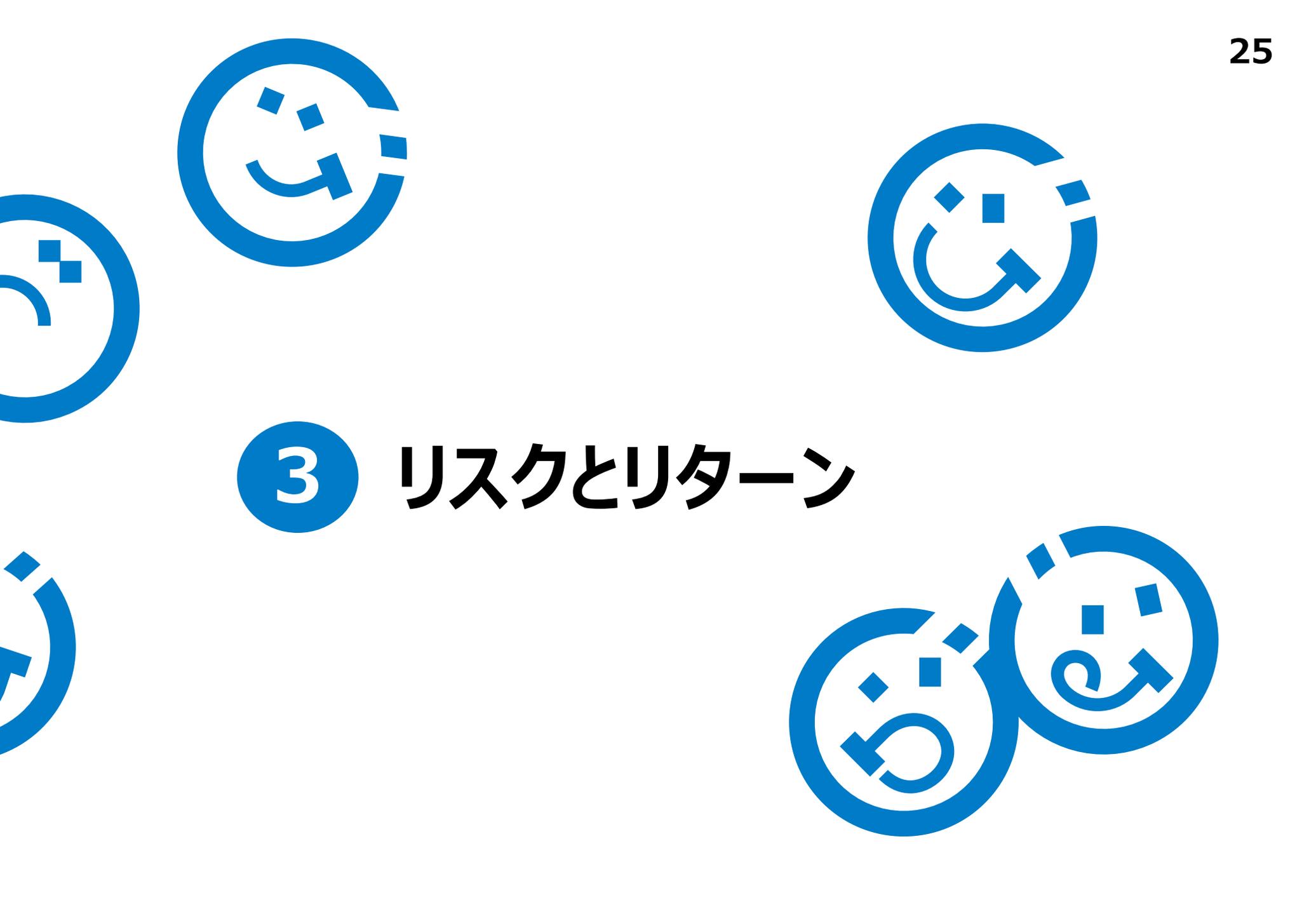
変動金利型



- どちらの金利が有利かは、①お金を運用する側か or 借りる側か、②市場金利の見通しが上昇するか or 低下するかによって、変わり得る。

		市場金利の先行き見通し	
		上昇する	低下する
運用	固定金利		○
	変動金利	○	
借入	固定金利	○	
	変動金利		○

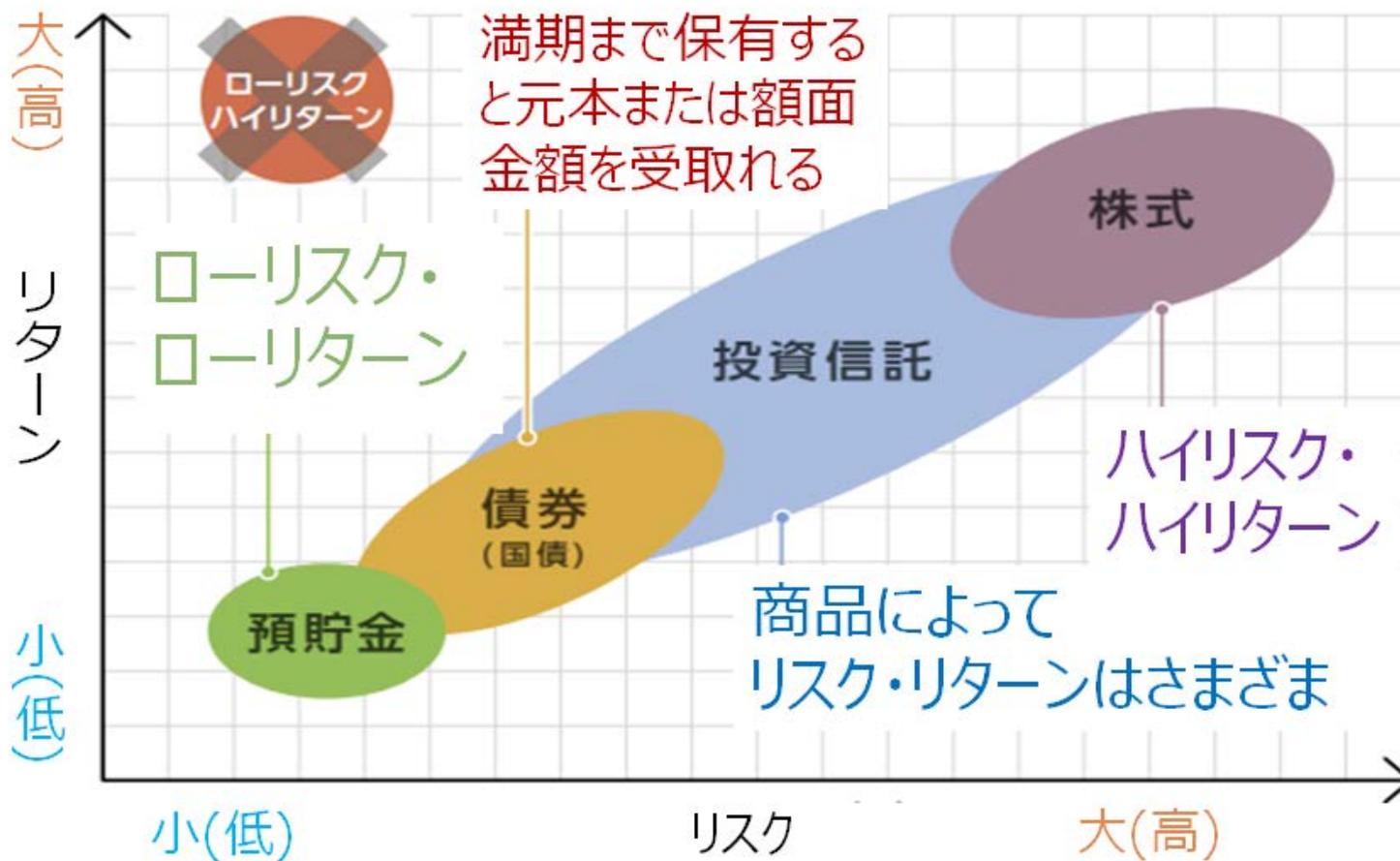
- なお、市場金利の見通しが上昇も低下もしない場合、お金を運用する側には金利が高い方が、借りる側には金利が低い方が、有利。



3 リスクとリターン

- 金融における「**リターン**」とは、「**資産運用を行うことで得られる成果**」を意味します。
- 金融における「**リスク**」とは、①保険の分野では、「**悪いことが発生する可能性**」を意味し、②投資の分野では、「**リターンが不確実であること**」、つまり、リターンが一定でなく、変化にさらされていることを意味します。

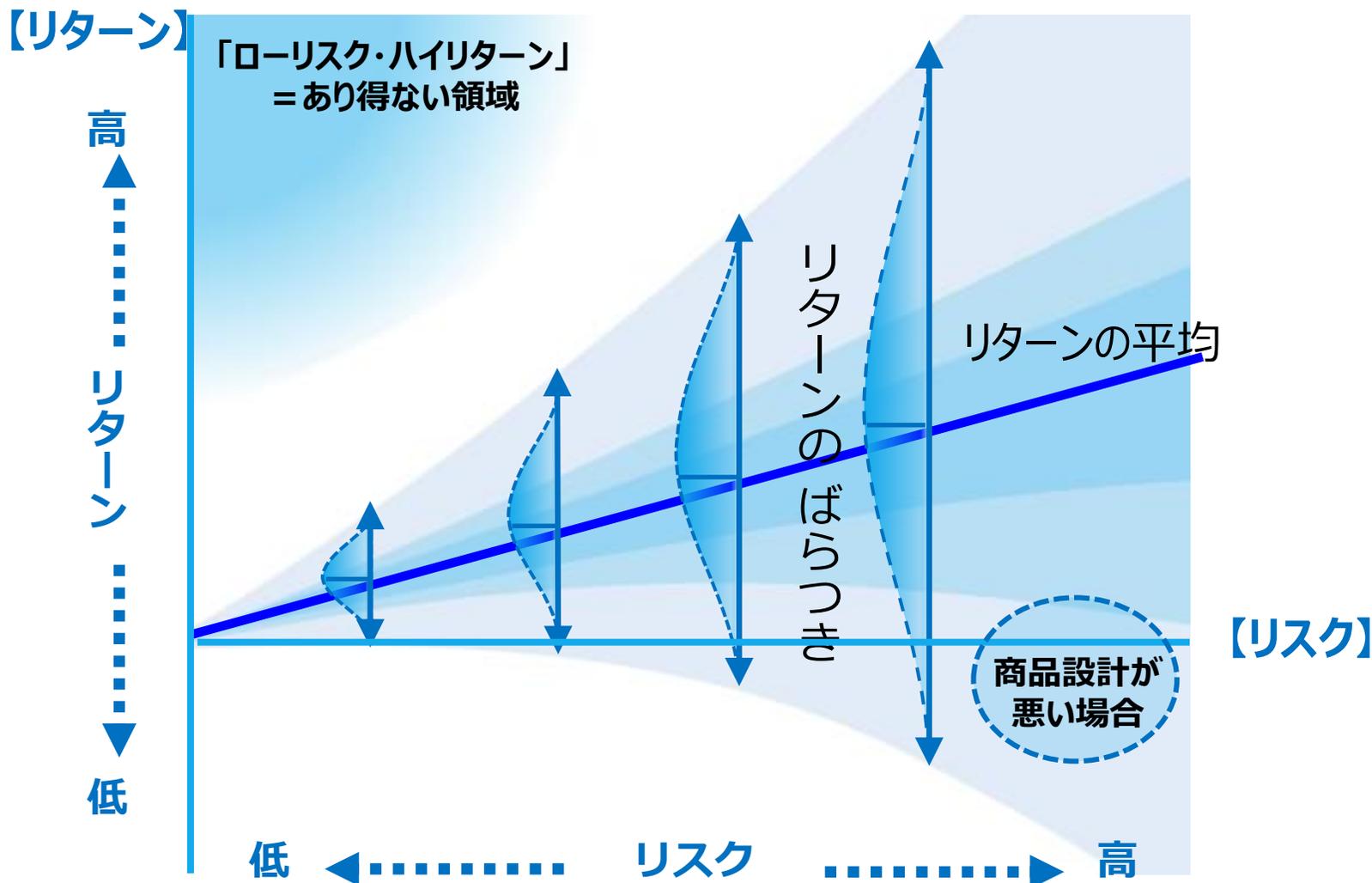
「ローリスク・ハイリターン」の金融商品はない



※ これは一般的なイメージ図であり、すべての金融商品があてはまるものではありません。

出所：金融経済教育推進会議 eラーニング講座「マネビタ」 「お金を増やす」-「資産運用 ～始める前に」

リスクとリターンには、総じて比例的な関係が見られる。



- リスクとリターンの間には一般に次のような関係がある。

- リスクとリターンには、総じて**比例的な関係**が見られる。
- 高いリターンを得ようとする、リスクも高まる。
→「**ハイリスク・ハイリターン**」
- リスクを低く抑えようとする、リターンも低下する。
→「**ローリスク・ローリターン**」
- リスクを高めれば、必ずリターンが高まる訳ではない。
- リスクが低くて、高いリターンを得られることは、通常はない。
→「**ローリスク・ハイリターン**」はない

金融商品の特徴は、3つの観点からとらえる

安全性

元本(元手)や利子の
支払いが確実か

収益性

期待できる
収益の大きさ

流動性

必要なときにすぐに
換金できるか

これら3つで「高い」評価が揃うことはない。

※安全性と流動性は両立が可能（例えば、普通預金など）



- お金が流通することで経済活動が支えられています。経済活動には景気循環があり、一般的に、好景気では物価や賃金、金利が上昇し、不景気ではそれらが低下します。
- 為替変動の影響は経済主体によって異なります。また、相場の予測は困難です。
- 金利はお金を貸し借りする際の値段であり、需要と供給によって決まるほか、政策金利の影響を受けます。金利が上昇すると債券価格は下落します。
- 金利には複利と単利があり、利子にも利子が付く複利の効果は、金利が高いほど、期間が長いほど大きい。金利は、市場金利をベースに信用リスク等を勘案して決まる。借り手の信用度が高いほど低い金利で借りられます。
- 資金の運用・借入を行う場合、市場金利の見通しに基づいて固定金利と変動金利を選択することが大切。
- リスクとリターンには比例関係がある。ローリスク・ハイリターンという「うまい儲け話」はない！